

第Ⅴ章 分析と考察

円筒上層 a 式の口頸部文様について

今回の調査で出土量の多かった土器の中でも、円筒上層 a 式とした類は、口縁部文様帯に多岐にわたる文様構成が認められた。文様構成における明瞭な新旧は把握できなかったが、大まかな変遷過程についての可能性を推察した。

本類の文様の基本的な構成要素としては、口縁部の突起、撚糸圧痕、隆帯、ボタン状の貼付け等が挙げられる。主たる施文要素は、円筒下層式からの流れの中で捉えられる撚糸圧痕と粘土紐の貼付けによる。本報告書の分類では、上層 b 式との差違は、端的に言えば馬蹄形の撚糸圧痕の有無だけである。

(口縁部)

円筒下層式よりやや肥厚し、平口縁・小波状口縁で、平口縁のものは小突起または短い隆帯などの貼付けがみられる。小波状のものは、山形・二又・低い弁状や鱗状の突起を持つ。口縁部がさらに肥厚したものは、波状の度合いが強くなり、外板の度合いも大きくなる。突起部分は大きな鱗状や王冠状になる。また、二又状のものには、あまり頂部が突出するものが少ない傾向がみられるが、弁状突起状にのびるものもみられる。

(文様区画帯)

山形突起の頂部から垂下する隆帯を基本とし、文様帯を 4 分割する。垂下隆帯に替わるものは、ボタン状または短い倭状の隆帯を貼付ける。また、渦巻き状の撚糸圧痕だけのものも存在する。突起が二又状のものは、その両端から 2 条の隆帯を垂下させるものが多い。

口縁部の波状が強いものには、その突起の意匠によって垂下隆帯に種々のバリエーションがみられる。基本的にはノの字及び X 字状、2 条の垂下隆帯は平行する稲妻形や逆台形状へ変化するようである。

(撚糸圧痕)

文様構成の基本となる施文方法で、長めの撚糸を原体としている。横位の撚糸圧痕は、基本的には口縁部と平行した圧痕であるが、口縁の波状が大きくなるに従って、山形突起の下部に空間が生まれ、これを埋めるべく斜位または渦巻き状の圧痕が追加して施文される。

二又状の突起をもつものは、初期段階から斜位の撚糸圧痕を施文しているようである。また、垂下隆帯をもたないものでは、ボタン状などの貼付け文の位置によって異なるが、平行した山形の撚糸圧痕を施文する。

波状の度合いが強い類には、最も低い部分にさらに文様区画を意図した縦位の意匠が施文さ

れる。この類の施文は口縁直下の数条の平行する圧痕や、枝葉状の圧痕など多様な意匠が施文され、各区画ごとに文様構成の異なるものも多くみられる。

(短線圧痕)

撚糸圧痕とともに主要な文様要素である。原体は、間隔のやや緩い絡条体によるものが多いようである。施文部位は、口唇部及び隆帯上への施文と、撚糸圧痕間への施文である。初期では、横位の撚糸圧痕間に縦位に施文するが、波状がやや大きくなると、やや斜位方向や、縦位方向のハの字、横位のハの字（羽状）または、横位の撚糸圧痕を挟んだ矢羽根状の施文がみられる。X字状のものは早い段階から存在するようである。

横位の連続したハの字状の圧痕は、円筒上層b式の馬蹄状の圧痕の原型とも考えられる。

(隆帯)

文様区画以外での施文は、口縁部が大きく肥厚し、また大きな波状のものにみられ、数条の撚糸圧痕部分に替わって隆帯での施文が行なわれるものもある。また、文様区画帯の発展的意匠としての施文も認められる。

これらの特徴から類推して、模式図のような変遷が考えられる。

初期段階としては、口頸部文様帯の幅が狭く、主要施文は横位を基本としている。口縁部はやや肥厚する程度で、胴部との区画の隆帯もごく低いものである。縦位の文様区画帯は口縁部の小突起下に、垂下する隆帯または、ボタン状などの貼付け文や山形の撚糸圧痕でなされている。短線圧痕は基本的に縦位である。

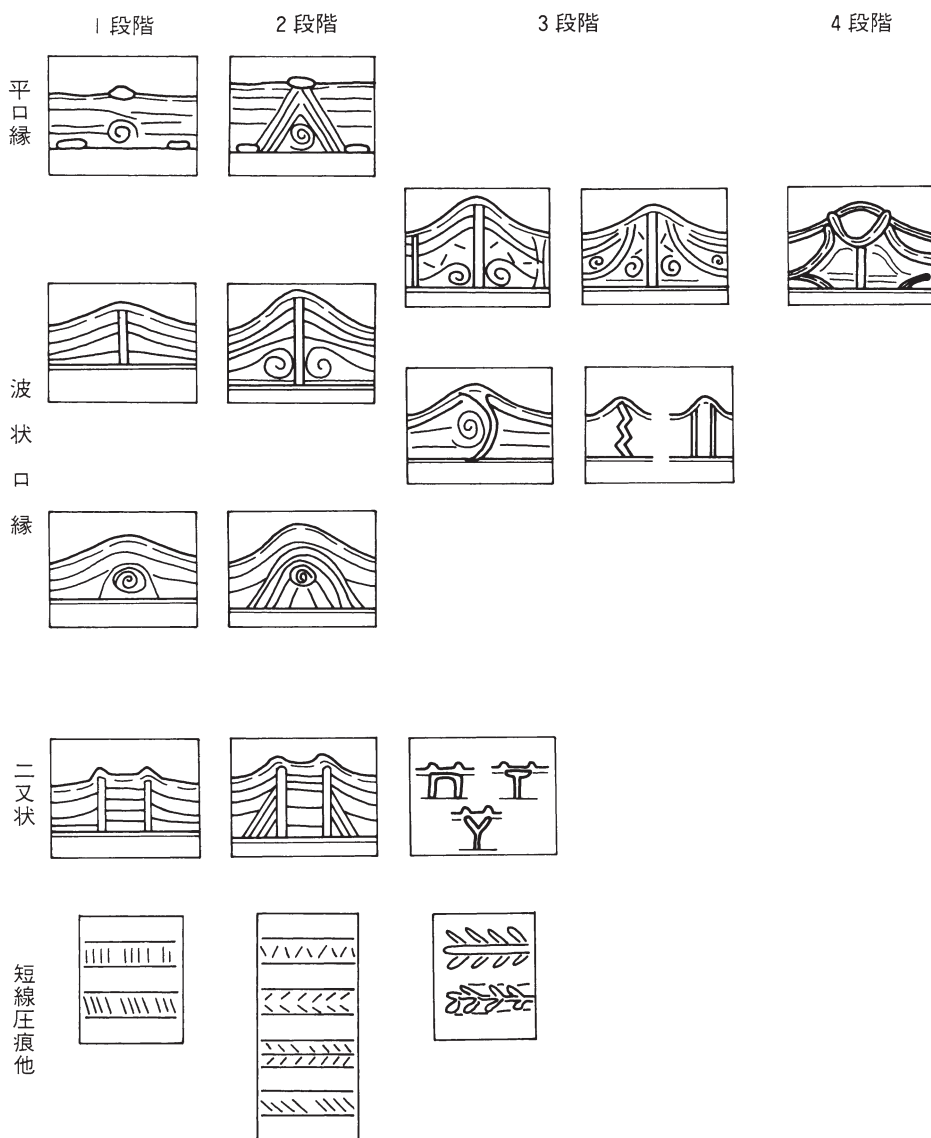
2段階としては、山形直下の文様区画帯において、斜位や渦巻き状の撚糸圧痕がみられるようになる。ただ、垂下隆帯が2条のものや、垂下隆帯をもたないものは、初期段階から斜位の施文がみられ、一概には発展形態とはいえないかもしれない。ただ、波状の度合いが強くなってきた段階においては、口縁部に平行な撚糸圧痕が、山形の直下に空白部を生み出すために、これらの意匠によって、空白部を満たす施文が行われるものと考えられる。この段階でも区画帯以外は、横位の撚糸圧痕に、短線圧痕を伴うものである。短線圧痕は縦位・斜位の施文に、縦位・横位のハの字状や矢羽根状がみられるようになる。

3段階としては、口縁部が大きく肥厚し、さらに外反の度合いが強く、突起は大きな鱗状や王冠状など大きく発達する。また、区画帯の垂下隆帯もノの字状や結束状の意匠などもみられる。二又状の突起を持つものには、2条の垂下隆帯からY字・T字・逆U字状への変化がみられるものもある。この段階では、前段階までの整然とした文様構成を受け継ぐものが少なくなり、自由な発想の意匠が多くなる。

もっとも新しい段階としては、隆帯を多用するものが充てられると考えるが、撚糸圧痕が整

然としたものも多くみられ、すべてがこの段階のものとはいえない。

また、巻き込んだような俵条の隆帯などの意匠は、突起が大きく発達する上層b式に受け継がれるものと考えられる。



槻ノ木遺跡における円筒上層a式の口頸部文様の変遷（模式図）

文様構成による変遷を考えてきたが、今回は主に、本遺跡の出土例に拠ったため、他の遺跡の出土例とは異なった様相を呈するかもしれない。

初期段階や2段階では、空白を埋め尽くそうとする意識が働いていたようであるが、撚糸圧痕の意匠に種々の文様が施文されはじめた段階から空白部が多くなり、短線圧痕に替わる圧痕もその間隔が広くとられるようである。また、これに反して、肉厚の隆帯を多用したものは、前段階のように密集した文様を展開している。このことは、文様構成上の何らかの規範が緩和された時点で、より自由な方向を指すものと、従来の構成に立脚した上で、さらに発達させようとする二者が存在した可能性が考えられる。

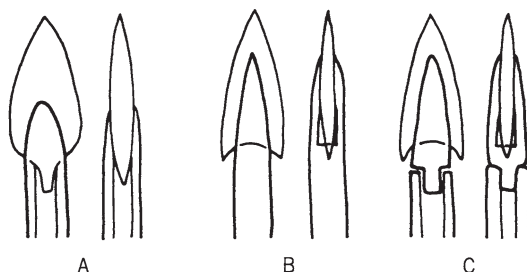
アスファルトの付着のみられる石鏃の着柄について

定形石器中でもっとも多く出土した石鏃の中で、32点にアスファルトの付着が観察された。これは総点数350点中の約1割にあたり、この時期、アスファルトが、相当量流入していたものと考えられる。出土資料の中で付着痕の認められるものを集成図にした。

アスファルトは、石鏃と柄との着装時の接着剤と考えられる。付着範囲は、当然のことではあるが、茎部の有無で大きく異なっている。付着の残存率の高い数点での比較では、無茎鏃は18・38・40にみられるように、器体の先端まで及んでいる。これに対し有茎鏃では149・170のように、茎部及び基部のみに付着がみられ、完形品では茎部端まで及んでいるのが観察される。

これらの付着範囲から、着装法を推定してみた。ただ、すべての鏃の装着にアスファルトを使用したとも思えないことから、接着剤を伴わない装着法の存在もあったものと考えられる。本稿では、単に付着範囲からの推定である。

まず、柄の材質としては竹管が考えられ、矢柄研磨器と推定される石器の例からも妥当と考えられる。特に、本県では円筒土器以降に圧倒的に出土率の高くなる有茎鏃においては、中空であることから、装着に最も適している素材と考えられる。逆説的にいえば、竹管が柄として



着柄推定模式図